平成30（2018）年度

大阪文化祭賞 受賞者決定

坂東竹三郎さんら９公演に賞を贈呈

大阪府内で1年間に開催された全公演の中から、とくに優れた成果をあげた人や団体を顕彰する大阪文化祭賞（主催：大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会）。昭和38（1963）年の創設以来55回目を迎えた今年度は、賞候補に推薦された60公演の中から、企画・内容・技術などが総合的に優れた9公演が選ばれました。審査員は、実際に公演を観た関西の著名な芸術家や文化人、ジャーナリストがつとめています。

今年度は、上方歌舞伎のベテラン・坂東竹三郎さん（歌舞伎役者）、六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会、尾高忠明指揮 大阪フィルハーモニー交響楽団が大阪文化祭賞に、その他6公演が奨励賞に選ばれました。

今年3月15日にリーガロイヤルNCB（大阪市北区）で贈呈式が開催され、坂東さんは「私の大好きな演目で賞をいただき、夢のような気持ち」と笑顔で語りました。また、六代目松鶴の弟子の鶴笑さんは、「皆に祝ってもらうてありがたいこと。あっち（天国）へ帰ったら、米朝や春団治らに自慢してやります」と、亡き師匠の言葉を〝代読〟し、笑いを誘いました。

関西・大阪21世紀協会は、大阪文化祭賞を芸術・文化分野における人材の発掘や育成、交流事業の一環として重視し、受賞者の記念公演を主催するなどアピールに努めています。また、受賞者の一層の励みとなるよう、副賞賞金（大阪文化祭賞20万円、奨励賞5万円）を提供しています。

受賞者（前列）と主催者および各部門の審査委員長（後列）

坂東竹三郎さん

笑福亭鶴笑さん（六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会委員長）

福山 修さん（大阪フィルハーモニー交響楽団事務局次長：尾高忠明さん代理）

各部門の受賞者　（　）内は受賞成果

第1部門　－伝統芸能・邦舞・邦楽－

坂東竹三郎（七月大歌舞伎『女殺油地獄』）／**大阪文化祭賞**
浦田保親（第656回 大槻能楽堂自主公演能『俊寛』）／**奨励賞**
水野箏曲学院
（MIZUNO KOTO ACADEMY ORIGINAL CONCERT vol.14）／**奨励賞**

第2部門　－現代演劇・大衆芸能－

六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会
（六代目笑福亭松鶴生誕百年祭）／**大阪文化祭賞**
人形劇団クラルテ
（第117回公演 創立70周年記念公演『はてしない物語』）／**奨励賞**
空晴＜からっぱれ＞（第17回公演『となりのところ』）／**奨励賞**

第3部門　－洋舞・洋楽－

尾高忠明指揮 大阪フィルハーモニー交響楽団
（ベートーヴェン交響曲全曲演奏会）／**大阪文化祭賞**
日本センチュリー交響楽団
（センチュリー・ジャズ・ナイト Vol.3）／**奨励賞**
DANCE PROJECT 218.＜にいや＞　（HAMLET）／**奨励賞**

平成30年度 関西元気文化圏賞贈呈式

本庶（ほんじょ） 佑（たすく）氏に大賞を贈呈

ニューパワー賞は 関西経済同友会「企業所有美術品展実行委員会」

本庶 佑氏

文化・芸術・スポーツなどの分野で活躍し、関西から日本を元気に明るくした人や団体へ、感謝と一層の活躍を期待して贈られる「関西元気文化圏賞（関西元気文化圏推進協議会・松本正義会長、関西・大阪21世紀協会も構成員の一員）。その贈呈式が文化庁芸術祭賞贈呈式と合同で行われ、本庶佑氏（京都大学高等研究院副院長・特別教授、神戸医療産業都市推進機構理事長）に大賞が贈られました。

京都市出身の本庶氏は、免疫の司令塔であるT細胞に「PD-1」という免疫の働きを抑える分子を発見し、免疫療法の原理を実証。この研究をもとに革新的な治療薬「オプジーボ」が開発され、多くのがん患者に希望を与えたことで2018年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

受賞者と主催者

また、将来性が期待できる人や団体に贈られるニューパワー賞は、関西経済同友会の企業所有美術品展実行委員会ほか2団体に贈られました。同実行委員会は2018年10月、関西の企業が所有する普段非公開の絵画を一堂に集めた展覧会を開催。子供たちへの「対話型鑑賞教育」や、地域の飲食店を巻き込んだ「福島アートバル」の開催など、今後の継続的な活動が期待されました。各賞の受賞者は次の通り。

大賞：本庶佑、**特別賞**：大阪桐蔭高等学校硬式野球部、アドベンチャーワールド、**ニューパワー賞**：関西経済同友会企業所有美術品展実行委員会、同志社香里高等学校ダンス部、スーパーキッズ・オーケストラ。（敬称略）

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発掘と発信」、「伝統の進化と創造」の3つを事業の柱としています。その中から、今年2～6月に実施された事業のいくつかをご報告します。

北新地に福を呼び込む早春の風物詩
堂島薬師堂節分お水汲み祭り

2019年2月1日／堂島薬師堂、曽根崎新地一帯
主催：堂島薬師堂節分お水汲み祭り実行委員会

大阪・キタの活性化と水都大阪の再生をめざし、関西経済同友会の提言を受けて平成16年に始まった「堂島薬師堂節分お水汲み祭り」。平成最後となった今回は、節分が日曜日となるため、2日繰り上げて実施されました。

堂島薬師堂で奈良薬師寺の山田法胤長老らによる節分法要が行われる中、薬師寺で祈祷された「お香水（こうずい）」を僧侶たちが参拝者の竹筒護符に汲み清め、千客万来・開運招福・無病息災を祈願。隣接する堂島アバンザの特設会場では、僧侶たちによる「声明（しょうみょう）」の詠唱をはじめ、北新地芸妓衆による舞の奉納や北新地で働く女性たちによるお化け（仮装）が披露されました。

その後、弁財天の化身といわれる龍とともに、打打打団天鼓の和太鼓を先頭に総勢約150名の大行列が夜の北新地を練り歩きました。

堂島薬師堂でのお水汲み

北新地に繰り出す龍や北新地クイーン、「お化け」たちの一行

交流サロン21cafe〈2019年1月30日・3月13日／中之島センタービル〉

『未来社会に何を残す？ 大阪・関西万博を考えよう』

奥野卓司氏（〈公財〉山階鳥類研究所所長、関西学院大学名誉教授）

1970大阪万博では、梅棹忠夫氏や小松左京氏らが立ち上がり、開催テーマやレガシーについての戦略を立てました。奥野氏はそうした経緯を振り返り、2025大阪・関西万博についてもテーマの意味や未来へのレガシーについて、「関西の町民」の立場で柔軟に考えてみようと促しました。経済産業省は「常識を超えた万博」を掲げていますが、AI（人工知能）などはすでに常識の範囲内。そこで奥野氏は、上方文化などの文化価値を高め、万博によって世界へ発信すると同時に、一つの拠点から関連拠点へとリアルワールドのネットワークを拡大するとともにリアルとバーチャルをネットワークさせることを提案。また、自然や生物とAIといった最先端技術を融合させて日本文化の魅力を高めていくことも例示されました。

奥野卓司氏

『上町台地 ～ 悠久の歴史』　北川 央氏（大阪城天守閣館長）

古来、天皇の即位儀礼は、践祚（せんそ）（三種の神器の受け渡し）、即位（高御座への登壇）、大嘗祭（即位後初めての新嘗祭）の三つで構成されてきましたが、鎌倉時代初期までは、これに加えて「八十嶋祭（やそしまのまつり）」が浪速の地で行われていました。北川氏は、この祭りがなぜ行われたのか、なぜ浪速の地が祭りの舞台になったのかについて、5500年前の上町台地の地形と八十嶋祭の舞台となる生國魂神社の成り立ちに遡って解説。大阪が「浪速」と呼ばれたのは、上町台地の北端（現在の大阪城付近）が大阪湾と河内湾をつなぐ狭い海峡で、潮流が速かったことに由来することなどを、日本書紀・古事記の記載や地図を示して説明。大阪が国生み神話の舞台であったことを参加者とともに再認識し、新しい令和の時代に大阪を盛り上げていきたいとお話しされました。

北川 央氏

都会の中で行われる華やかなお田植え祭り
住吉大社 御田植神事（国指定重要無形民俗文化財）

6月14日／住吉大社（大阪市住吉区）

日本三大田植祭りの筆頭に上げられる「御田植神事」は、神功皇后が五穀豊穣を祈るため住吉大社に神田を設け、長門国（現在の山口県）から植女（うえめ）を召して御田植を奉仕させたのがはじまりとされています。明治時代に入って中断されましたが、大阪新町花街の協力で復活し、芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救いました。現在は関西・大阪21世紀協会（上方文化芸能運営委員会）などが、大阪の伝統文化・神事芸能として支援しています。令和最初となる今回も、御田に設えた舞台で御稔女（みとしめ）による雨乞い祈願の神田代舞（みとしろまい）や、田の周囲で住吉踊り（無形文化財）などが賑やかに奉納されました。

神田代舞を奉納する高見瀧子さん

御田植風景